

徽州碑刻の時間と地域分布およびその学術的価値

卞 利¹
(翻訳・解説：遠藤隆俊²)

(¹安徽大学徽学研究センター・²高知大学教育学部)

The Academic Value of Huizhou's Inscriptions in China

Bian LI¹, Endo TAKATOSHI²

¹ *Center for Huizhou Studies, Anhui University, China*

² *Faculty of Education, Kochi University, Japan*

Abstract: Formerly there were several thousand of the stone inscriptions at Huizhou, but there are only one thousand of inscriptions today. We investigated and recorded the 411 pieces of inscriptions at Huizhou. These inscriptions have the same value as the 50 thousand pieces of the Huizhou documents that were discovered in 1920s. In this paper I introduce the contents of these inscriptions to research the society, economy, history and culture of Huizhou.

Keywords : Huizhou, stone inscriptions, academic value, Chinese history

引 言

徽州社会経済史とりわけ明清時代の徽州社会経済史を主体として、総合的に徽州全体の歴史、文化および徽州人の活動（徽州内外を含む）を研究する徽学は、20世紀の萌芽、形成、発展期を経て、20世紀の末から21世紀の初めにはより活発になり、次第に内外の学界が注目する学術領域の研究に発展した。50万件に近い契約文書や2000種あまりの家譜、100種に近い地方志と徽人の文集、雑記などの材料を使って研究を進める徽学研究は、既に内外における徽学研究者の主要な研究方法となっている。

しかし、我々が注意したいのは文献を用いて徽学を研究する伝統のほかに、徽州の実地に深く入りフィールド調査を進め、碑刻などの豊富な地域文化資料を収集することも、文献を利用して研究する徽学に対して重要な助けとなる点である。これは徽州の過去の社会経済や歴史文化を再現する可能性をもつだけでなく、さらに重要なのはフィールド調査を通して収集した各県の碑刻が、徽州の生きた歴史を理解するのに特別な意義を有していることである。

我々は2000年より徽州の各地に散在する碑刻について集中的な調査と抄録を実施し、現在までに黟県、休寧県、婺源県、歙県、祁門県、績溪などの6県1区において、411通（処）¹⁾の碑刻を収集した。これらはみな徽州の社会経済と歴史文化の発展過程を、総合的に反映している。これら碑刻資料の内容は宋代から中華民国に至る徽州商人、徽州宗族、徽州宗教、民俗信仰、公益事業、徽州の歴史人物など、徽州の経済、社会、文化など各方面の領域にわたり、かつこれまでの徽学研究者が使用したことがなく、その学術的価値も計り知れない。

時間の経過によって、ある碑刻は自然現象と人為的な原因によって既に損壊しているものもある。

したがって、包括的な碑刻の調査と抄録、整理と研究は、徽学研究の第一次資料を提供するためだけでなく、さらに徽州の貴重な文化遺産を救うためにも重要である。

1. 徽州碑刻資料の時空分布

我々が収集、抄録した411通の徽州碑刻中、時代的に最も早いのは宋代元豊年間（1078－1085）、婺源県の汪杞墓誌銘であり、最も遅いのは民国34年（1945）、歙県棠樾の抗日戦争勝利記念碑である（注：本章で収録した碑刻の下限は民国38年のものであり、新中国の碑刻は収録していない。また純粋な書画の碑文も収録していない。このほか、民国の葉為銘が収録した14巻本の『歙県金石志』に収録された歙県碑刻の最も早い後梁大同元年の「呂場碑」や唐代碑刻2通、宋代碑刻13通は、実地に収録できなかったため、ここには数えていない）。ざっと整理した状況を見てみると、明清時代の碑刻資料が最も多く、そのうち清代がとりわけ多い。

徽州碑刻の具体的な時間と地域分布について、以下の表を作成したので、参考にしていただきたい。

徽州碑刻資料の時間と分布表

分布地域	分布、時代および数量						合計
	宋	元	明	清	民国	不詳	
歙 縣	1	1	22	42	20	5	91
休 寧	1		22	19	3	5	50
婺 源	5		2	65	4	14	90
黟 縣	2		2	14	3	1	22
祁 門			20	101	11		132
績 溪	1		6	15	4		26
合 計	10	1	74	256	45	25	411

この表を見ると、徽州碑刻の時間と地域分布について、以下いくつかの特徴が表れている。1つは宋代以前の碑刻がなく、わずかに10通の宋代碑刻があるだけである。宋代碑刻の中で、南宋のものが多く、北宋は3通である。「宋元豊元年十月十九日婺源汪叔通墓地買地券碑」²⁾、「宋元符二年季冬廿六日婺源佛説八師經碑」³⁾、「宋政和三年九月歙県王道寧墓誌銘碑」⁴⁾である。このほかの7通は南宋のものであり、「宋淳熙二年十二月十七日婺源汪杞墓誌銘碑」⁵⁾、「宋嘉泰元年休寧海陽鎮朱唏顔墳志」⁶⁾、「宋嘉泰元年八月十九日黟県碧山村黄籙法壇龍簡碑」⁷⁾、「宋宝慶三年閏五月婺源勅賜黄連院重建鐘樓記」⁸⁾、「宋淳祐五年仲冬婺源勅賜黄連源記」⁹⁾、「宋宝祐五年六月一日績溪伏嶺遙遙岩古道江南第一関蛤臺石石刻」¹⁰⁾、「南宋黟県碧山訪友記」¹¹⁾である。現存する宋代の碑刻は数量的には極めて少ないが、しかし文化的価値は比較的大きい。2つめに、元代の碑刻はわずかに1通のみである。これは元代徽州の社会と文化が、蕭々としたものであったことの直接的な反映である。

3つめは、明代と清代の碑刻が最も多く、とくに明代の嘉靖と万暦年間、清代の乾隆、道光年間に集中している。地域的には祁門、歙県、婺源が多い¹²⁾。徽州碑刻のこのような時間と空間の分布は、基本的に徽州の歴史発展の状況を反映している。すなわち明の嘉靖、万暦、清の乾隆、道光年間は、徽州の社会経済が最も繁栄した時期であり、とりわけ徽州商人が最も活躍した時期である。乾隆30年から道光年間は、棚民が徽州に入った時期であるが、その規模と影響が最大の時であり、

大量に残されている乾隆、嘉慶、道光年間の碑刻は、事実上、棚民を禁止、駆逐し、生態環境が破壊に直面するのを保護する問題をめぐって立てられたものである。

2. 徽州碑刻の主な内容

我々が碑刻を収録した範囲は具体的かつ明確であり、徽州の社会、経済、歴史、文化を総合的に反映している（部分的に摩崖石刻を含む）。徽州6県に分布する411通の碑刻から見ると、その内容は大変に豊富であり、ざっと概括すれば以下のいくつかの問題を反映している。

第1は宗族問題である。歴史上、宗族は徽州の社会的基礎であり、實際上、徽州は宗族が聚居した一大地域である。この地域の中で、宗族は人々の生産や生活、はては精神世界までもしっかりと制御し、また左右していた。いわゆる「新安は族を聚めて居り、絶えて一雑姓の攪入する者もなし。其の風、最も近古たり。出入の齒讓、姓には各々宗祠の之を統ぶる有り。歳時伏臘には、一姓村中、千丁みな集まり、祭りには朱文公家礼を用い、彬々度に合す。父老嘗て謂う、新安に数種の風俗有りて、他邑に勝る。千年の塚、一抔も動かず、千丁の族、未だ常には散居せず。千載の譜系、絲毫も紊れず」¹³⁾とある。宗族における血縁関係の純潔性を保つため、ある宗族は系譜を紊乱する現象、甚だしくは国家権力の介入に至るまで、これを弁別しまた打破した。「清乾隆五十一年四月初二日祁門社景黟県正堂嚴禁偽派盜素左田黃氏宗支告示碑」¹⁴⁾は、黟県左田の黃氏宗族が黃氏の系譜を紊乱しようとしたことに対して打撃を加えた碑刻であり、これは徽州における宗族碑刻の代表的なものである。

宗族は決して国家の正式な基層組織ではなく、また地域社会の正式な組織でもない。しかし、これは地域社会において重要な役割を与えられ、また一定程度の、はては正式組織と同様の機能を持っていた。宗族には固有の田地や山場、祠堂、さらには学校（私塾、書院）があり、家譜の編纂と族内構成員の管理（奨励と懲罰）および祖先祭祀と墳墓の祭祀を制御していた。我々が収録した碑刻の中で、宗族の運営に関わる内容の碑文は大きな比重を占めている。例えば、「明嘉靖二十年閏五月歙県紹川張氏新建宗祠記碑」¹⁵⁾、「清乾隆五十三年冬月祁門奇峰鄭氏塾学序碑」¹⁶⁾、「清嘉慶二年十月祁門造祠樂輸碑記」¹⁷⁾は典型的な事例である。この3通の碑刻は、徽州宗族が宗祠の造営や学校および学田の管理において、絶対的な権威と他に代替できない地位を持っていたことを体現している。また宗族が族産を制御したことは、明清時代に徽州の宗族経済が繁栄した重要な基礎となっている。例えば、清嘉慶二年歙県棠樾の「鮑氏義田記」「鮑氏義田禁碑」と清同治元年四月「祁門嚴潭王氏義積會記碑」などは、鮑氏宗族や王氏宗族が族産を制御した典型的な事例である。まさに「祁門嚴潭王氏義積會記碑」が言うように「義田の設くるは、儲蓄を裕し、荒歉に備え、貧乏を濟く所以の者なり。吾が村の陶章公祠は先年、田租二百秤を倡輸す。曾て輸契を立て、「義積」と言う。…一切の規条は尤も宜しく緊密なるべし。もし強きを持みて侵蝕すれば、定めて官を鳴び処治するを行い、効尤せしむること母かれ」¹⁸⁾とある。「鮑氏義田禁碑」もまた次のように強調する。「田は既に宗祠に帰せば、惟だ宗祠のみ之を主る。請うらくは宗人と約さん。凡そ戸田を体源し、率ね以て我が族の鰥寡孤独の長久の経費と為し、祖宗の公事に藉りて移用侵削するを得ず」¹⁹⁾と。徽州宗族が族田や義田、学田、祀田などの公共財産に対して、厳重に制御したことがわかる。

宗族は基層公共の事務と社会秩序を管理する面でも、その他の組織が発揮しがたい作用を発揮した。明代中後期、社会経済の発展と徽州商人の経営上の大きな成功にともなって、徽州社会には未曾有の変化が現れた。「金令は天を司り、錢神は地を卓す」²⁰⁾と。人々の道徳行為をいかに規範化し、教化の義務を履行するかについて、徽州宗族は郷約を配合し徽州各地で基層教化の機能を発揮した。祁門彭龍村の汪氏宗族と績溪大坑口の胡氏宗族の、明嘉靖五年「祁門拾柒都裏社申明郷約碑」²¹⁾、「績溪上郷祖社郷約碑」²²⁾によれば、宗族と県、郷の官府は共同で社会の安定を守り、郷約を創立し、

道德教化の重要な措置を励行した。清代乾隆30年以降、徽州に近い安慶と江西贛北地域の客民が、徽州の黟県、休寧、婺源、祁門、歙県と績溪などの山地に進入し、野蛮な開発を進めた。これら「棚民」と呼ばれる客民は、徽州に進入したあと、樹木を伐採し炭を焼き、苞蘆を植えて水土の大量流出を引き起こし、生態環境を急激に悪化させた。例えば、棚民が比較的集中している休寧の浯田では「僻居の廿都五閭、地は浙省に連なり、田は少なく山は多し。貧民は生を営むに、半ば耕種に藉り、半ば樵采に藉りて、楽業に安居し、升平を共用す。異地の棚民、山を挖して墾種し、地方は其の小利を貪るを知る無く、濫召妄租す。惟だに山は残廢に遭うのみならず、樵采に資することなく、砂石は下に瀉し、田は漲荒を被る」²³⁾とある。

このように家園の環境が破壊される状況の中で、いくつかの宗族は家園を保護し、棚民の進入を厳禁し、棚民を駆逐する運動に乗り出し始めた。いくつかの宗族は、棚民や流民を厳禁し棚民を駆逐する官府の告示を石に刻んで碑を立て、永遠に示した。類似の碑刻は徽州6県で30通残されており、これら棚民の入山と耕作を厳禁した碑文によって、我々は乾隆から道光年間の徽州における棚民の問題を系統的に研究することができる。例えば、清道光6年、祁門県黄古田の汪氏宗族は族長の名義で祁門県に石を刻み、棚民が「山場を盗租し、苞蘆を除種する」ことを厳禁した。この碑銘は「奉憲永禁棚民貪利除種碑」²⁴⁾である。類似の碑刻には「清嘉慶十八年仲夏月祁門葉源永禁砍伐林木和賭博等事碑」²⁵⁾、「清道光十五年十月祁門横連蓮花奉憲永禁鋤種以保祖祠碑」²⁶⁾、「清道光十五年閏六月初二日祁門西郷二十二都奉縣永禁惡丐碑」²⁷⁾、休寧県の「清道光二十二年岩前唐頭奉憲現金遊民」²⁸⁾などがある。

徽州宗族は農村社会の治安と経済秩序を維持、保護する方面でも顕著な作用があった。宗族が社会の治安と安定を維持するのを最も集中的に反映した碑刻については、「禁賭碑」という碑刻が大量に残されている。我々が収集、抄録した「禁賭碑」は、主に祁門県と婺源県に集中している。例えば、祁門の「清嘉慶十三年十月十五日祁門縣許村禁止賭博碑」²⁹⁾、「清光緒十八年祁門歷溪奉憲示加禁賭博碑」³⁰⁾、婺源の「清嘉慶十年八月初禁、同治四年六月加禁婺源冲田奉例永禁賭博碑」³¹⁾、「清嘉慶十五年四月二十七日示、民国二十六年加禁婺源洪村永禁賭博碑」³²⁾である。これら碑刻の内容は簡単で、多くは当地の宗族あるいは郷約が村の中や路上、橋のたもとに石碑を立て、一般には陰刻で「憲を奉じ、永く賭博を禁ず」と刻し、石を立てた者や年代などを刻んでいる。一回禁じて止まなければ、再び禁じる。その場合、碑刻の上には具体的な文字として「奉憲加禁」「加禁賭博」とある。このほか、宗族が経済秩序を保護した事例としては、主に家族や郷村において経済事務を管理しまた仲裁したことがある。例えば、祁門渚口の倪氏宗族の「清道光三年祁門渚口申禁茶葉交易興利息碑」³³⁾、婺源の「清道光四年五月初一日婺源清華洪村光裕堂公茶規碑」³⁴⁾があり、これらは宗族の名義で茶葉を公平に交易し、平均的な価格で取引するのを規範とする実態を記した記録である。宗族の名義でもって族内成員の経済問題や民事問題を調節した碑刻も、徽州には少なからず存在する。まさに徽州宗族は社会の治安と安定、経済秩序を維持、保護する方面で、重要な作用を的確に発揮したのである。

徽州碑刻の内容は宗族の領域のほか、公共事業に関わる領域も大量にある。例えば、橋の建設や道路の修理に関わる碑文である。これらの碑刻の事跡は人を感動させるだけでなく、記載の事実もまた信用できる。徽州は山がちな地域であり、単に高い山が連なり峰がそびえるだけでなく、溪流も数多く分布し急流が激しいところである。したがって、橋や道路を作ることは、徽州人が経済を発展させ交易を展開し、正常な生産と生活活動を進めるための重要な事業である。我々が探し当てた建橋碑と開山修路碑は徽州6県にわたり、各県ごとにある。例えば「宋宝祐丁巳六月一日績溪伏嶺遙遙岩古道江南第一関「蛤臺石」石刻」³⁵⁾、「明化成十五年十月祁門桃源里橋記」³⁶⁾、「明隆慶元年四月休寧齊雲山吏部右侍郎林平泉修路碑記」³⁷⁾、「明万曆十九年十月歙県重修河西太平橋碑」³⁸⁾、「清

順治九年十二月歙県重修太平橋記碑³⁹⁾、「清乾隆五十年三月休寧齊雲山修路碑⁴⁰⁾」、「清道光二年十一月十二日祁門県大洪嶺修路碑記⁴¹⁾」などである。これらの碑刻で、徽州人が歴史上、橋を建て道路を修理するなどの公共事業に熱心であったとする記載は、信用できるものである。例えば「清道光七年孟冬祁門大坦郷大洪嶺修路碑」には「明万暦の間、祁門の鄭節婦は出金修辟す」とあり、道光初年には「黟県の太学生舒君朝瑜、候選同知史君世椿、候選州同知方君元郊、候選吏目胡君嘉墉、太学生項君邦根、候選理問舒君立勲、候選都司金君漢、候選理問舒君立德ら、其の間に往来し、触目驚心し毅然として多金を倡捐し、引きて己が任と為し、並て煩勞を憚らず、四出勸募し、徽郡の諸善士を集め、能く解囊して共に之を勸め、六年を踰て、功始めて告成す⁴²⁾」との事跡が記録されている。

徽州における大量の伝記碑刻には、徽州地域社会における各階級、階層の人物の活動が詳しく記録されており、徽州地域社会の人物を研究するための重要な第一次資料となっている。これらの人物伝記には墓誌銘や去思碑などが含まれる。墓誌銘中には朝廷の官僚がおり、例えば婺源文化局の「宋故朝散大夫韶州太守汪公墓誌銘」「清乾隆二十三年二月二十一日休寧溪口木幹吏部尚書汪由敦墓誌銘碑（満漢合文）」⁴³⁾がある。文人学者には「清康熙三十七年十月歙県潜口汪洪度墓誌銘碑記⁴⁴⁾」がある。また一般の労働者、例えば徽州商人や節婦などの墓誌銘として「元至正十六年撰文、清乾隆六十年重刊歙県蜀源鮑孝婦貞烈氏伝碑⁴⁵⁾」、「明万歴三十年二月歙県鄭村故処士少徽商海鄭君墓誌銘碑⁴⁶⁾」がある。さらに新安画派の開祖である漸江和尚の伝記石碑もある。当地の人々が各府県の知事など父母官を頌えた「去思碑」から、我々は当該官僚が政務を執った時期の政績やその土地の社会経済状況がわかり、もっとも直接的な史料を提供してくれる。例えば歙県新安碑園の「明正徳元年八月徽州知府何公德政碑⁴⁷⁾」、「明万歴四十年十一月祁門呉公新祠碑⁴⁸⁾」などである。

教育文化に関する碑刻も、徽州に現存するものは少なくない。徽州は文化教育を重視し、文化教育が十分に発達した地域である。「新安は南遷の後より、人物多く、文学の盛んなること、天下に称さる。其の時に当たり、井邑田野より以て遠山深谷に至るまで、居民の処、学有り、師有り、書史の蔵有らざるは無し⁴⁹⁾」とある。もとより「東南鄒魯⁵⁰⁾」の誉れのあるところである。儒学の書屋や書院を建てた碑刻もいくつか抄録している。例えば、歙県中学校に現存する「清乾隆五十七年歙県紫陽書院規条⁵¹⁾」、黟県中学校崇教祠の「清嘉慶十六年新建碧陽書院記」「嘉慶十六年公議碧陽書院規条」「嘉慶十七年經理建造碧陽書院記」「嘉慶十七年創建碧陽書院工匠姓名碑⁵²⁾」および婺源の「清光緒十年婺源汪口永禁霸収霸吞私相典売養源書屋膏火田碑⁵³⁾」である。このほかさらに清末に興った新式学堂の「歙県清光緒三十三年新安中学堂記碑⁵⁴⁾」がある。文会活動の展開およびそれに関わる規約には、歙県雄村の「文会条約碑⁵⁵⁾」などがある。以上が徽州の教育文化に関わる碑文であり、当時とりわけ明清時代の徽州における教育文化事業の発達を反映している。これはまた徽州における文化教育発展の直接的な体现でもある。

徽州の宗教信仰に関わる碑刻は、我々が収録した411通の徽州碑刻の中で、非常に大きな比重を占めている。徽州は歴史的に朱熹の理学思想が統治の地位を大きく占めており、宗族制度も統治に深く関わっていた。これにより、多くの人々は徽州における宗教勢力の影響が、非常に小さかったと考えている。最近では、許承堯が清代乾隆時期の江蓮が著した『歙風俗礼教考』を引いてこう言っている。「徽州は独り教門無く、また族居に縁るの故に、惟だに郷村中に錯居し難きのみにあらず、即ち城市の諸大姓もまた各々段落に分かる。いわゆる天主の堂、礼拝の寺、従りて建つ無し。…徽俗は佛道の教を尚ばず、僧人、道士は惟だ之を用いて以て齋醮を事とするのみ。敬信崇奉の者無し。居るところは、湯茗を施すの寮、香火を奉じるの廟に過ぎず。其の崇宏壯麗なるいわゆる浮屠、老子の宮、絶えて有る無し⁵⁶⁾」とある。ただし、我々が調査し収録した碑刻から見ると、仏教、道教やその他の宗教、信仰に関わる碑刻は少なくない。例えば、「宋元符二年季冬廿六日婺源県佛説八師

経碑」「宋宝慶三年閏五月婺源勅賜黃連院重建鐘樓記」「宋嘉泰元年八月十九日黟縣碧山村黃籙法壇龍簡碑」「宋淳祐五年仲冬婺源勅賜黃連院記」である。また祁門西峰寺にある大きな摩崖石刻、および道観の興建と香火の義捐に関わる記事の碑刻や、歙県潜口の「清康熙五年重修都天廟碑」⁵⁷⁾もある。さらに中国四大道教聖地の齊雲山道教摩崖石刻や績溪校頭蜀馬覺乗寺「明万曆二十七年胡文泰捐産碑」「崇禎四年祀産碑」「清康熙三年重修覺乗寺碑記」「清道光十四年重建覺乗寺碑」⁵⁸⁾、および歙県清同治四年の「重修河西関帝廟記」⁵⁹⁾などがある。これら宗教碑刻が大量に存在している事実は、徽州が決して一つの宗教しかない土地ではなかったことを表明している。これらの碑刻を考えてみると、明代中期以来、徽州の僧侶と俗人の間に経済などにおける紛糾と訴訟が増加していた事実がわかる。我々は、徽州の宗教勢力が宋代以来大きくなっていてと考えている。とくに重視に値するのは、徽州において儒教思想ないし仏教思想が主流を占めるという問題に疑義を提示している碑刻があるという点である。「清道光十四年績溪蜀馬村覺乗寺記碑」には言う。「後梁以来、其の間、人事の変遷、村落の滅没、何ぞ紀すに勝えんや。独りここ古刹は千有余年、猶能く後先相継ぎて存し、且つ宏壯を加う。豈に釈氏の教、果たして儒より高きや」⁶⁰⁾と。徽州の信仰はこのように濃密であったのであり、「徽州は独り教門無く、…佛道の教を尚ばず」という説は根拠のないものである。もし、清末徽州の人々が九華山の仏教や齊雲山の道教に絶えず参詣したという場面、すなわち「一たび秋冷に届べば、其の九華山、齊雲山に赴き焼香還願する者、絡繹して絶えず」⁶¹⁾とあるのを参照すれば、徽州の人々が仏教や道教を尊ばなかったという判断はおのずと誤ったものとなる。

徽州の碑刻には、さらに多くの内容がある。例えば、歙県の漁梁壩を含む水利施設建設の碑刻や官庁施設建設のための休寧、績溪の鼓楼碑記、そのほかさらに詩碑、画碑などである。清嘉慶年間、婺源延村の2通の文昌閣詩碑などは、文字が端麗だけでなく、詩文もまた優美である。その中の1通に、探花の伍長華が文昌閣修理のために贈った詩文には、次のようにある。「黄山白岳、秀にして神、淑氣鐘靈、偉人を出ず。朱子淵源、垂教遠く、雪峰接跡、契情眞なり。延川繚繞、千層の碧、傑閣巍峨、万象新た。為に雄才美舉と成るを羨み、君を知るに明月是れ前身」⁶²⁾とある。書法の碑刻に至っては、例えば歙県許村大宅祠の「雲溪堂法帖」⁶³⁾など単純な書法のほか、多くは著名な書家の碑刻である。これにより、これらの碑刻は徽州の社会、経済、文化的事象を記載するだけでなく、それ自身に書法価値があったと言える。劉墉の「清嘉慶七年歙県棠樾鮑氏義田記」などは、その典型である。

3. 徽州碑刻の学術的価値

以上、我々は徽州碑刻の主な内容について簡単に論述してきた。ここから見られるのは、徽州碑刻が低い学術的価値しかないとは決して言えないということである。これまで、内外の学者は徽州契約文書や地方志、家譜などの文献資料を利用して徽学を研究し、大きな成果を上げてきた。ただし、碑刻資料の収集と利用についてはおろそかだったので、ある種具体的な問題の論述においては、偏りが出現したことも免れない。今回、我々が徽州碑刻の全面的な調査、収集、整理、研究を行ったことにより、この学術研究上の欠陥を補うことができた。さらに、徽学研究の中でこれまで研究者が注目してこなかった問題について、碑刻資料をもとに浮かび上がらせることができた。今後、この方面における一定程度の展開が期待される。以下、徽州碑刻資料の主要な学術的価値について、いくつかの面から論じたい。

第1に、金石文献としての徽州碑刻についてである。碑刻そのものは契約文書と同じく、重要な原文書の1つである。徽州文献学あるいは徽州文献史においても金石文献がないとすれば、不完全なものである。よって、徽州碑刻の利用と研究は、徽州の社会経済史学者が行うべき責任であるとともに、また徽州文献学者も行わなければならない重要な職責である。

第2に、徽州碑刻資料は記載されている歴史事実が完全であり、またその時間も非常に長い。よって、文書あるいは文献中の多くの不足や欠を補うことができる。例えば、徽州郷約の問題について、過去の研究者は岩寺郷約が最も早い郷約とずっと考えてきた。しかも徽州ではいつ郷約が実施されたのか、よく知るすべがなかった。これに対し、我々は祁門彭龍で発見された「明嘉靖五年四月十二日祁門縣拾柒都里社申明郷約碑」⁶⁴⁾によって、徽州において郷約が実施されたのが、つとに明代の嘉靖5年であったとわかる。これは、今まで知られている中で、最も早く徽州で系統的に郷約が実施された年代である。これまでも、明代の成化年間に郷約が実施されたという記録はある。しかし、この碑刻の発見によって、徽州郷約研究の一大空白が埋められることになり、その学術的価値がはっきりとした。さらに、宋代から民国時代における大量の宗教碑刻が発見されたことにより、いわゆる「東南鄒魯」思想に支配されたとされる民間の精神生活の別の側面を深く研究することができる。

加えて、徽州碑刻資料は、我々が歴史時代における徽州の社会経済的發展を総合的に研究するための大きな手助けとなる。かつての徽学研究では、多く静態的な方面からこの大きな問題に関心を払ってきた。のちに徽州文書の大量発見、とりわけ具体的な家族や宗族の文書、文献の発見によって、家族、宗族を動態的に分析する事例研究が可能となった。これに対して、何人かの学者は徽州における社会経済の総合的な研究を目指し、著しい成果を上げて、徽学研究の大きな領域を開拓した。徽州碑刻資料の発見は、このような総合的、動態的研究に大きな手助けとなる。宗族組織の構造や運用、地域における地位、影響、作用について、大量の宗族碑刻は我々の研究に対して最も価値ある第一次資料を提供している。例えば、宗族の棚民に対する態度や措置、太平天国以降の徽州における宗族の復興と再建、徽州における橋梁や道路の資金集めと建設過程、維持、修理、保護の措置などである。これらについて、徽州碑刻はみな詳細な記載がある。例えば、清代の徽州知府が休寧で登封橋の保護のために立てた「峻示碑」は厳しい規定である。すなわち橋梁を保護するためにこの橋では「車を推して曬打するのを厳禁し、煨暴汚穢する毋かれ。欄石にて刀を磨くを許さず、橋角にて魚を戳するを禁止す。もし敢えて故意に違犯すれば、定めて拿究を行い饒さず」⁶⁵⁾とある。これら原資料はその他の文献には記載がなく、その価値は重要である。

最後に、徽州碑刻には、さらに文化遺産と芸術面の重要な価値がある。徽州碑刻は一種の地元の文化遺産であり、その価値は十分に明らかである。一つ一つの碑刻はみな精美な文化遺産である。「元統二年歙県棠樾郷天堂村元墓生瑩碑」⁶⁶⁾はつとに専門家によって国家一級の文化遺産と鑑定され、歙県博物館に手厚く收藏されている。「清乾隆五十六年孟冬黟県西通胡氏宗族榮翰建造宗祠碑記」「清乾隆五十六年孟冬月黟県西通胡氏宗族敦本祀会碑」⁶⁷⁾も、世界文化遺産を構成する重要な一部として、既に世界文化遺産に登録されている。齊雲山の摩崖石刻は全体が重要文化財として、中国の全国重点文物保護単位に入れている。徽州碑刻の文化財的価値は、時代と歴史の変遷によって、ますます重視されている。と同時に、徽州碑刻はそれぞれが精美な書法と彫刻の芸術品である。徽州碑刻の大部分の価値は陰刻にあり、その字体は力強い楷書だけでなく、婺源浙嶺の「呉楚分源碑」のような濃厚蒼美な隸書であったり、婺源延川の「文昌閣詩刻碑」のような秀麗な草書であったりする。書法と彫刻の角度からこの碑刻の研究を進めれば、疑いなく徽州芸術史研究を推進する作用になるであろう。

以上をまとめれば、徽州碑刻資料の学術的価値は、まさにそれが反映する内容と同じく、多方面にして多岐にわたる。我々はこれら資料宝庫の発掘と使用を重視し、それぞれの領域から全面的な検討と研究を展開して、徽学研究を新段階に推し進める努力をしなければならない。

注

- 1) 本文で使用する碑刻の計量単位は「通」あるいは「処」とし、「塊」を使用しない。なぜなら、1通あるいは1処で完全に記載される史実の碑刻は、いくつかの「塊」からなり、多い時には10余塊にもなるからである。
- 2) 原碑は現在、江西省婺源縣文化局内に存す。
- 3) 原碑は現在、江西省婺源縣文化局内に存す。
- 4) 原碑は現在、安徽省歙縣披雲山新安碑園内に蔵す。
- 5) 原碑は現在、江西省婺源縣文化局内に存す。
- 6) 原碑は現在、安徽省博物館に蔵す。
- 7) 原碑は現在、安徽省黟縣檔案館に蔵す。
- 8) 原碑は現在、江西省婺源縣秋口鎮黃源村委員會内に置く。
- 9) 原碑は現在、江西省婺源縣秋口鎮黃源村委員會内に置く。
- 10) 原石刻は現在、安徽省績溪縣伏嶺逍遙岩古道江南第一関門の東150mのところにある。
- 11) 原碑は現在、安徽省黟縣碧山村培筠園内に立つ。
- 12) 表面上でみたところ、祁門縣の碑刻の数が最も多く、婺源、歙縣がこれに次ぐ。ただ、祁門縣の調査は比較的徹底しており、婺源、休寧、歙縣は不徹底である。そのうち、休寧縣の齊雲山と雲煙湖の碑刻百余通はまだ抄録していない。歙縣の南郷と西郷、徽州区は基本的にまだ調査、抄録していない。婺源縣は浙源など十余郷はまだ調査していない。表中に反映している徽州各縣の碑刻の数量と分布は非常に不完全である。
- 13) 清代、趙吉士『寄園寄所寄』卷11「泛葉寄・故老雜記」による。
- 14) 原碑は現在、安徽省祁門縣橫聯郷景村一本道の煉瓦に埋め込まれている。
- 15) 原碑は現在、安徽省祁門縣紹川張氏宗祠内に立つ。
- 16) 原碑は現在、安徽省祁門縣蘆溪郷奇口村一本堂の祠屋内に立つ。
- 17) 原碑は現在、安徽省祁門縣博物館内に蔵す。
- 18) 「清同治元年四月祁門縣嚴潭王氏義積會記碑」。原碑は安徽省祁門縣溶口郷嚴潭村王氏宗祠右の煉瓦に埋め込まれている。
- 19) 「清嘉慶二年十月歙縣棠樾義田禁碑」。原碑は安徽省歙縣棠樾村男祠内の煉瓦にはめられている。
- 20) 万曆『歙志』考卷5志6「風土」。
- 21) 「明嘉靖五年四月十二日祁門縣拾柒都里社申明郷約碑」。原碑は現在、安徽省祁門縣彭龍村田野の路上に立つ。
- 22) 「明嘉靖五年二月朔日績溪縣大坑口上郷祖社郷約碑」。原碑は現在、安徽省績溪縣瀛州大坑口村尚書府の門前に立つ。
- 23) 「清乾隆五十九年四月休寧浯田嶺嚴禁召棚民種山碑」。原碑は現在、安徽省休寧縣龍田郷隆田村の一商店の壁に埋め込まれている。
- 24) 「清道光六年三月祁門縣黃古田奉縣永禁棚民貪利鋤種碑」。原碑は現在、安徽省祁門縣胥嶺郷黃古田橋のたもとに立つ。
- 25) 原碑は現在、安徽省祁門縣新安郷葉源村聚福堂内の東壁に埋め込まれている。
- 26) 原碑は現在、安徽省祁門縣橫連蓮花村劉龍雲家門口に立つ。
- 27) 原碑は現在、安徽省新安郷政府の傍らに立つ。
- 28) 「清道光二十二年十二月十九日休寧齊雲山鎮唐頭村奉憲嚴禁乞丐強討惡索碑」。原碑は現在、安徽省休寧縣齊雲山鎮唐頭村の一豚小屋内にたおれている。
- 29) 原碑は現在、安徽省祁門縣曆口許村進安屋基処に立つ。

- 30) 原碑は現在、安徽省祁門県彭龍郷歴溪村舜溪橋のかたわらに立つ。
- 31) 原碑は現在、江西省婺源県賦春冲田村中の川の埠頭に刻まれている。
- 32) 原碑は現在、江西省婺源県清華鎮洪村村門の八の字の壁に埋め込まれている。
- 33) 原碑は現在、安徽省祁門県渚口郷渚口村の東約半里くらいの大路の傍らに立つ。
- 34) 原碑は現在、江西省婺源県清華鎮洪村光裕堂の外壁に埋め込まれている。
- 35) 原石は現在、安徽省績溪県伏嶺逍遙岩古道江南第一関門の東約150mのところにある。
- 36) 原碑は現在、安徽省祁門県桃源村桃源廊橋の壁に埋め込まれている。
- 37) 原碑は現在、安徽省休寧県齊雲山の上に立つ。
- 38) 原碑は現在、安徽省歙県新安碑園内に立つ。
- 39) 原碑は現在、安徽省歙県徽城鎮披雲山太白楼内に存す。
- 40) 原碑は現在、安徽省歙県徽城鎮披雲山太白楼内に存す。
- 41) 原碑は安徽省祁門県大坦郷大洪嶺のほとりに立つ。
- 42) 原碑は安徽省祁門県大坦郷大洪嶺に立つ。
- 43) 原碑は現在、安徽省休寧県溪口鎮木幹村汪由敦墓前に立つ。
- 44) 原碑は現在、安徽省黄山市徽州区潜口鎮に蔵す。
- 45) 原碑は現在、安徽省黄山市徽州区潜口鎮蜀源村蜀源小学校内に立つ。
- 46) 原碑は現在、安徽省博物館に蔵す。
- 47) 原碑は現在、安徽省歙県新安碑園内に蔵す。
- 48) 原碑は現在、安徽省祁門県博物館内に蔵す。
- 49) 道光『休寧県志』巻1「疆域・風俗」。
- 50) 弘治『徽州府志』巻1「地理1・風俗」。
- 51) 原碑は現在、安徽省歙県徽城鎮の歙県中学校古紫陽書院中祠の左側の壁に埋め込まれている。
- 52) 原碑は現在、安徽省黟県中学校崇教祠の壁に埋め込まれている。
- 53) 原碑は現在、江西省婺源県汪口村養源書屋の壁に埋め込まれている。
- 54) 原碑は現在、安徽省歙県新安碑園に存す。
- 55) 原碑は、安徽省歙県雄村竹山書院の壁に埋め込まれている。
- 56) 民国の許承堯『歙事閑譚』巻18「歙風俗礼教考」。
- 57) 原碑は現在、安徽省黄山市徽州区潜口鎮に存す。
- 58) 原碑はみな安徽省績溪県蜀馬村蜀馬村小学校に存す。
- 59) 原碑は現在、安徽省歙県新安碑園に存す。
- 60) 原碑はみな安徽省績溪県蜀馬村蜀馬村小学校に存す。
- 61) 清の劉汝驥『陶甕公牘』巻10「稟詳・徽州府稟地方情行文」。
- 62) 「清嘉慶初年婺源延川水口文昌閣文昌閣詩碑」。原碑は現在、江西省婺源県延村觀希家に立つ。
- 63) 原碑は現在、安徽省博物館に蔵す。
- 64) 原碑は安徽省祁門県彭龍村の田野の路上に立つ。
- 65) 「清乾隆徽州府正堂竣示碑」。原碑は現在、安徽省休寧県齊雲山下、登封橋の欄板の上に立つ。
- 66) 原碑は現在、安徽省博物館に蔵す。
- 67) 二碑は安徽省黟県西逋村の門前に立つ。

解 説

本論文は、安徽大学徽学研究センター主任の卞利先生が、2007年1月に高知大学で研究発表および講演をした原稿を一部改訂し、翻訳したものである。卞利先生のご専門は明清時代の徽州におけ

る社会経済史であり、著書に『明清徽州社会研究』（安徽大学出版社）など多数ある。今回は文部科学省科学研究費特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」（日記班：代表者遠藤隆俊）の共同研究および国際学術シンポジウムのために来日し、研究発表を行った。また、安徽大学と高知大学とは友好協定校になっており、徽学研究センターとも往来、交流がある。先生はシンポジウムのあとも高知大学で研究に従事され、人文学部と教育学部で授業や講演を行った。本論文はその時の研究発表、ならびに講演の原稿をもとにしている。

内容は徽州で新たに調査した碑刻、碑文の研究であり、非常に詳細かつ網羅的である。当初、先生はこの中の宋代碑文を遠藤に提供し、すぐに使って研究を行うように勧められた。しかし、まずは当地の学者でありまた調査者自身である先生が碑刻の概要を紹介し、日本人の研究者にも使いやすいように周知した方が良いのではないかとの結論に至った。その成果が本論である。安徽大学や北京の中国社会科学院には、有名な徽州文書が多数所蔵されており、徽学研究の宝庫となっている。今回の碑刻資料はそれを大きく補完する材料として注目され、今後の研究に大きな可能性を開くものである。その意味で、本論は非常に貴重な研究である。

2007年11月16日受理

2007年12月31日発行